

## 看護専門学校生の多様化と初年次教育

久 司 一 葉

〔抄 録〕

本論文では、看護専門学校における初年次教育の内容について考察する。90年代末頃から大学生の学力低下問題は社会的関心を集め、高等教育のユニバーサル化とあいまって2000年に入ってから初年次教育が注目されるようになった。この学力低下問題は大学生にとどまらず、看護専門学校においても深刻な問題となっている。今回、看護専門学校入学生79名にアンケート調査とインタビューによる検証をおこないその結果、看護専門学校入学時の年齢によって必要とされる初年次教育の内容が異なることが明らかとなった。

キーワード：初年次教育，看護学生，専門学校，アンケート調査

### はじめに

初年次教育は、1970年代アメリカで始まった。高校から大学への移行を円滑にすることを目的とすると定義される教育支援であり<sup>1)</sup>、日本においては大学生の学力低下問題が社会的関心を集め、2000年を過ぎた頃から導入されることとなった。その必要性は、18歳人口の減少と学力低下問題に端を発するが、実際には学力低下だけにとどまらない多様性をもった学生を目前にし、従来どおりの大学教育では十分ではないことから始まっている。M・トロウが大学のユニバーサル化を唱え<sup>2)</sup>日本において大学全入時代を迎えることになった。平成22年学校基本調査によれば受験生数と大学受験生数がほぼ同数である（図1参照）。このことは、高等教育機関にとっては多様な背景を持つ学生を受け入れることにつながった。

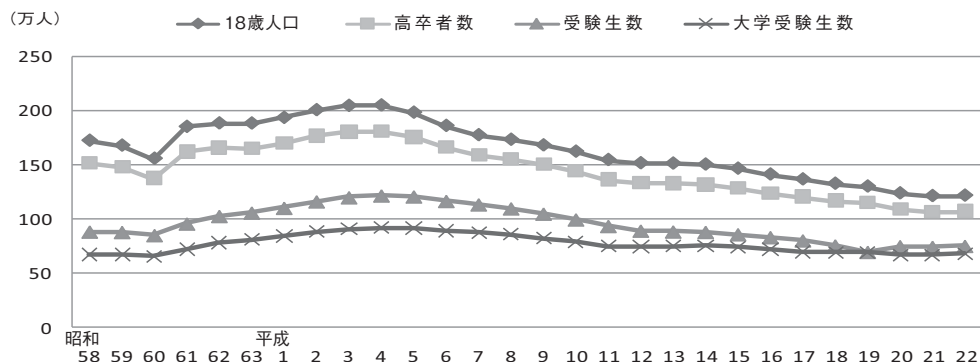


図1 18歳人口と高卒者数・大学受験生数の推移

旺文社教育情報センター平成22年学校基本調査速報より作成

<http://passnavi.evidus.com/teachers/topics/1009/0901.pdf> : 2010年9月21日アクセス

以上の問題は大学教育だけにとどまらず、多様な高等教育機関において喫緊の課題としてよく、本論文で取り上げる看護専門学校においても同様である。看護専門学校は、看護を実践できる人材を養成することが目的の高等教育機関のひとつであり、必要年限を経て修学することで、卒業時には看護師国家試験受験資格を付与される。大学同様、社会情勢の変化に伴い多様な背景を持つ入学生を受け入れることになり、教育現場ではその対応に苦慮することもしばしばである。

そこで本論文では、看護専門学校での初年次教育実施の可能性を明らかにすることを目的とし、「看護専門学校に入学する学生の年齢により、必要とされる初年次教育は異なる」と仮説をたて、検証をおこなった。その方法は、看護専門学校入学年に「勤め先の選び方」、「いまの学校で得られるもので就職して役立つと思うこと」、「仕事についての考え」、「現在の学校への入学動機」、「現在の学校に通って感じること」以上5点についてアンケート調査し、集計・分析をおこなった。また、アンケートだけでは不明確な点を明らかにするためインタビューをおこない分析した。これらをもとに、看護専門学校における初年次教育内容について考察した。

## 1. 看護専門学校の背景と変遷

現在わが国において看護師免許を取得する方法は複数あるが、高等学校卒業後の学生は、大学の看護課程・短期大学の看護課程・看護師養成所の3つから選択することとなる。看護専門学校は看護師養成所に該当し、専門学校に属している。専門学校とは昭和51（1976）年に新しい学校制度として創設された専修学校の3課程のなかの1つであり<sup>3)</sup>、学校教育法では「職業若しくは實際生活に必要な能力を育成し、または教養の向上を図る」ことを目的としている。社会のニーズに即応した、柔軟で実用的なカリキュラムを編成し、より高度な専門技

術や技能の取得を目指す教育機関として、大学に次ぐ重要な役割を担っている。看護専門学校を卒業し、看護師国家試験に合格すれば看護師免許を取得することができる。学校数は昭和56(1981)年は359校であったが、平成4(1992)年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の制定により、その数は増加し、平成12(2000)年にはピークを迎えて502校となった(図2参照)が、平成21(2009)年では484校となっている。入学資格は、高等学校卒業生および3年制の高等専修学校卒業生であるが、各看護専門学校の入学基準は多様であるのが現状である。

近年、日本の人口動態の変化は少子高齢化が顕著となっている。戦後の高度経済成長をとげ経済が潤い始めると、社会構造も変化し始めた。少子化では、18歳人口の減少に伴い平成19(2007)年には希望すれば誰でも大学に入学できる大学全入時代を迎えるといわれ、平成22年度の高校卒業生の進路は、大学47.9%、次いで専門学校と就職が共に15.8%の順である(図3参照)。

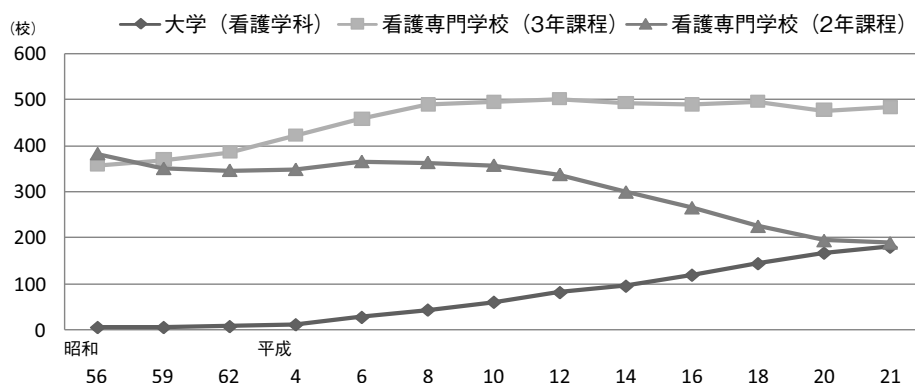


図2 看護師学校数年度別推移

医学書院販売部 SP 課調べ：看護学校便覧 2009 より作成

次に、看護師等の養成制度の現状について述べる。まず、少子化を予測して、大学の新設・増設を抑制してきた文部科学省であったが、大学設置基準の大綱化により、要件を満たせば新設や短期大学からの変更を許可するようになった。結果、昭和55(1980)年には400校程度だった大学は平成22(2010)年5月現在778校で前年度より5校増加となり、一部の大学を除き、事実上の「大学全入時代」を迎えている。そのため学力低下や履修歴の多様化が顕在化し、多くの大学で高等学校の「リメディアル教育」を余儀なくされているのが現状である<sup>4)</sup>。看護教育は大学、短期大学、高等学校、養成所にておこなわれているが、看護系大学数は看護専門学校同様に、「看護師等の人材確保の促進に関する法律」制定に伴い増えており、平成21(2009)年現在では181校となっている(図2参照)。定員数をみると、看護専門学校

は 939 ポイント、看護系大学は 1,125 ポイント前年度を上回っている。数値で見ると、入学対象者の数が減少しているにもかかわらず、看護専門学校への入学定員の数が高いといった現象<sup>5)</sup>は、看護専門学校への門戸が広がったと解釈できる。

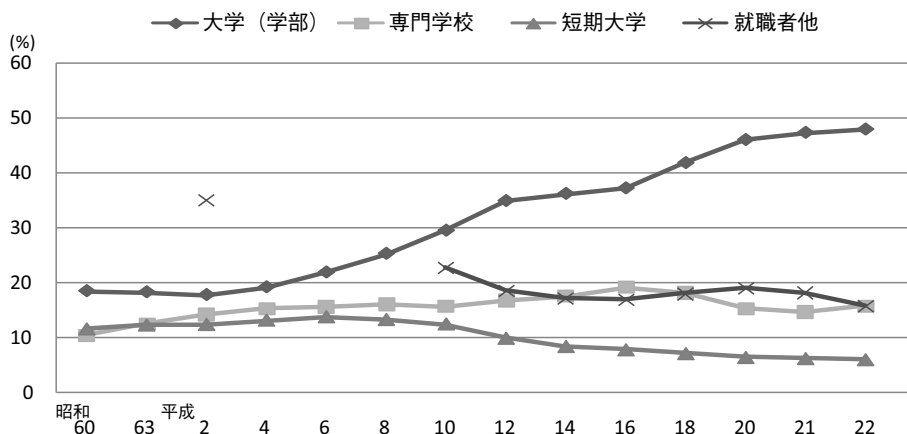


図3 高卒者の進路別割合の推移

旺文社教育情報センター平成22年学校基本調査速報より作成  
<http://passnavi.evidus.com/teachers/topics/1009/0901.pdf> : 2010年9月21日アクセス

看護基礎教育における初年次教育に関する先行文献に目を向けると、新設の看護大学が開校以来、人間関係に悩みを持つ大学生が増えていることをふまえて、大学側のサポート体制をアピールすることを目的とした「新生生のオリエンテーション合宿」をおこなった報告がある<sup>6)</sup>。また、推薦入学者半数以上の学生が「大学の授業についてゆけるか不安」と答えた調査結果に基づき、「入学前課題の実施と評価」をおこない成果があったとしている<sup>7)</sup>。看護専門学校では「卒業前の看護技術フォロー学習」をおこない、基礎的知識や医療安全に対する意識向上の結果を報告している<sup>8)</sup>。これらは、看護基礎教育界ではまだ初年次教育という言葉すら認識されていない時期のことであり、導入教育や補習教育の色合いが強いといえる。一方、最近では看護専門学校での初年次教育を探ったところ、看護基礎教育や看護専門学校における初年次教育に関する文献は見つからないといった報告がある<sup>9)</sup>。そこで、看護専門学校生におこなった調査結果から、看護専門学校における初年次教育について考えてみたい。

## 2. 看護学生の意識調査をとおしてみえるもの

はじめに、調査をおこなった看護専門学校は、平成4（1992）年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」制定に伴い設立された開校12年目の学校であり、同地域には国立大学法人医学部保健学科看護学専攻、独立行政法人国立病院機構附属看護学校、私立医科大学附属看護専門学校といった歴史の古い学校から、創立6年目の公立看護大学まで、大学2校、専

門学校8校、高等専門学校1校計11校がある。入学通知受理後の辞退者がある場合は、補欠合格者への電話連絡等で入学生を確保してきたため、入学生の定員割れはきたしていないが、男女はもちろん高校卒業直後の学生以外に、最高齢50歳代の学生を受け入れた経緯がある。このように多様な入学生がひとつのクラスを組織し学校生活を送るため、授業中の意欲や態度に違いが生じ、教師もまた授業を一様に進めることへの困難を感じている。

そこで、看護専門学校の同一クラスにおいても、学生の年齢の違いにより学習への意欲や態度に違いがあると考えた。例えば、受けてきた教育年限の差や教育のブランクが生じ、その結果獲得している一般知識に差がある。あるいは、就業することへの考え方が異なっているため、看護師という職に就くことへの展望に違いがある。そして、他者とのコミュニケーションスキルや接し方に違いがあるため、学校生活を送る態度が異なるなどである。

以上のことを検証するために、看護専門学生に対してアンケート用紙を用いた調査を実施した。

## 2・1 調査の概要

### 1) アンケート調査の概要

調査対象はA看護専門学校新入生計79名(男性8名、女性71名)、平均年齢20.3歳である。調査は平成17(2005)年7月および平成18(2006)年7月、分析は統計ソフトSPSS Ver.12.0を使用した。調査にあたり学生へは調査結果は研究以外には使用しないこと、同意できない場合は協力しなくてよいこと、協力しなくても不利益は被らないことを口頭と文書で説明した。その場所からの退室がないことで同意したものと判断した。

調査項目と数は、1.「勤め先の選び方」18項目、2.「いまの学校で得られるもので就職して役立つと思うこと」5項目、3.「仕事についての考え」31項目、4.「現在の学校への入学動機」11項目、5.「現在の学校に通って感じること」22項目、計87項目である。

対象を入学時の年齢により、以下の3つに分類した。まずは看護専門学校の最大の顧客である高校卒業直後の18-19歳の群(以下「現役群」とする)。次に、高校卒業後大学や短大に進学し、勤労経験3年未満の20-25歳の群(以下「再入学群」とする)。そして就職して3年以上の26-35歳の社会人経験者の群(以下「社会人群」とする)である。結果は年齢を独立変数とするクロス集計をおこない、年齢群ごとの特徴を考察した。

### 2) インタビューの概要

アンケート調査では推測にすぎない点について、年齢による違いを明確にするためインタビューをおこなった。インタビューは半構造化面接法にておこない設問に関連して自由に語ってもらった。研究者と二人でおこない、内容は承諾を得て記録した。目的は、それぞれの高校卒業からA看護専門学校入学までの経緯、学習への意欲や今後への展望を聞くことと、コ

コミュニケーションスキルを持ち合わせているかを知ることである。

## 2・2 結果と考察

### 1) アンケート調査の結果と考察

#### (1) 勤め先の選び方

「勤め先の選び方」18項目では、年齢群による有意差を認めたのは「職場の安定性」「長く勤められる」「自分の技能や経験が生かされる」「職場周囲の環境のよさ」の4項目だった(表1)。

表1 「年齢群」と「勤め先の選び方」

	現役群			再入学群			社会人群		
	あまり重視しない	重視する	特に重視する	あまり重視しない	重視する	特に重視する	あまり重視しない	重視する	特に重視する
職場の安定性	0	19.3	80.7	0	50.0	50.0	0	50.0	50.0 $\chi^2=7.447, df=2, p<.05$
長く勤められる	12.3	22.8	64.9	25.0	50.0	25.0	0	70.0	30.0 $\chi^2=13.885, df=4, p<.01$
自分の技能や経験が生かされる	1.8	26.3	71.9	0	50.0	50.0	20.0	10.0	70.0 $\chi^2=12.004, df=4, p<.05$
職場周囲の環境のよさ	1.3	36.8	54.5	8.3	50.0	41.7	40.0	30.0	30.0 $\chi^2=8.602, df=4, p<.01$

まず、「職場の安定性」についての結果は、社会人群・再入学群は「重視する」・「特に重視する」がともに50%だった。現役群は、「重視する」が19.3%と少なかったが、「特に重視する」は80.7%にのぼった。このことは、安定性とは何かについて特に説明もないまま用紙へ記入されたため、経営面や給与面のことととらえたとすれば、高校を卒業するまで親元で暮らしていた現役群の中には、親の勤め先の状況が自分の身に影響を及ぼすという体験に直面したことがある学生が少なからずいると予測できる。仕事をするということが、金銭の安定に直結すると感じていても不思議ではない。また、小杉によれば、25～29歳の世代への最も望ましい就業形態の調査では、男女ともに正社員を望ましいとしている<sup>10)</sup>。再入学群・社会人群が安易に契約を打ち切られない正社員となることを安定性と解釈していると判断できる。

次の、「長く勤められる」の結果は、社会人群は「重視する」70%、「特に重視する」30%で「あまり重視しない」はいなかった。再入学群では「あまり重視しない」25%、「重視する」50%、「特に重視する」25%と「あまり重視しない」が3群の中で最多であった。現役群は「あまり重視しない」12.3%、「重視する」22.8%、「特に重視する」64.9%で社会人群に次いで重視する回答が多かった。ここでは、「あまり重視しない」回答が3群で最多の再入学群について考える。原<sup>11)</sup>は、専門学校をとりまく状況の変化について、生涯学習型の参加者の増加によると断言しており、再入学群の看護専門学校入学も同様と考えることは可能である。また、社会人群は勤めていた経験から、同じ職場に「長く勤められる」ことを「重視する」のは自然の結果といえる。現役群が社会人群に次いで重視する回答の多いことは、「職場の安定性」同様に勤め続けられることと家庭の収入を関連させているととらえることもできよう。



「自分の技能や経験が生かされる」では、社会人群は、「あまり重視しない」20%、「重視する」10%、「特に重視する」70%だった。再入学群は「重視する」「特に重視する」がそれぞれ50%だった。現役群では、「あまり重視しない」は1.8%とわずかだが、「重視する」26.3%、「特に重視する」は社会人群を抜いて71.9%の結果だった。再入学群が「自分の技能や経験が生かされる」ことを「重視する」「特に重視する」で占めたことは、原の、「肩書としての『学歴』よりも実質としての『資格』への志向」<sup>12)</sup>に匹敵するのではないだろうか。また、現役群の結果は、専門学校進学予定の高校生への調査結果で、職業を選択する際に仕事内容を重視する傾向にあることと一致する<sup>13)</sup>。一方「あまり重視しない」が2割の社会人群の解釈とは、自身のこれまでの就労経験により培われた技能や経験のことととらえているためでないかと推測する。

最後に「職場周囲の環境のよさ」の結果では、社会人群は「あまり重視しない」40%、「重視する」30%、「特に重視する」30%だった。再入学群は、「あまり重視しない」8.3%、「重視する」50%、「特に重視する」41.7%だった。現役群は「あまり重視しない」8.8%、「重視する」36.8%、「特に重視する」54.4%だった。この結果は「職場周囲の環境のよさ」を「あまり重視しない」社会人群は、職場周囲の環境への関心は薄く、やはり就労することそのものを強く意識しているといえる。また、「重視する」「特に重視する」で9割にのぼる再入学群・現役群については、高校卒業後高等教育へ進学する高校生への調査結果「仕事の選択には勤務地を重視」する傾向に一致する<sup>14)</sup>。

以上、有意差のあった勤め先の選び方の「職場の安定性」「長く勤められる」「自分の技能や経験が生かされる」「職場周囲の環境のよさ」の4項目より、社会人群は就労することに対して意識があり、それに比べ再入学群・現役群は就労することへの認識が不十分であることが明らかとなった。特に、再入学群の結果からは職に就くことへの関心は感じられないが、現役群と共に「自分の技能や経験が生かされる」ことを勤め先を選ぶ条件としていることは、高校生の進学理由で増加傾向にある、「専門知識や技術を修得するため」「資格を取得するため」と一致すると見なすことができる<sup>15)</sup>。

## (2) いまの学校で得られるもので就職して役立つと思うこと

ここでは、「一般的な教養」「仕事に必要な知識や技術」「広い社会的視野」「職業的な資格・免許」「独創的な発想をする力」の5項目について尋ねた。

有意差が得られたのは、「広い社会的視野」ひとつだった。結果は、現役群が「役立つ」68.4%と最も多く、「どちらでもない」31.6%だった。社会人群は、「役立つ」30%、「どちらでもない」60%、「役立たない」10%であり、再入学群では、「役立つ」「どちらでもない」がともに50%だった(表2)。「一般的な教養」「仕事に必要な知識や技術」「職業的な資格・免許」「独創的な発想をする力」に対する考えは、年齢による違いがないということであり、高校卒業後4ヶ月を経過した時期の現役群だけが、「広い社会的視野」という表現に反応した

かのような結果である。社会人群の「役に立たない」としている結果の方がむしろ興味深く、これまでの職業から移行する理由に、何か関連するとも考えられる。

表2 「年齢群」と「いまの学校で得られるもので就職して役立つと思うこと」

	現役群			再入学群			社会人群		
	役立つ	どちらでもない	役に立たない	役立つ	どちらでもない	役に立たない	役立つ	どちらでもない	役に立たない
広い社会的視野	68.4	31.6	0	50.0	50.0	0	30.0	60.0	10.0

$\chi^2=11.58, df=4, p<.05$

### (3) 仕事についての考え

仕事についての考えの設問数は全部で31項目にのぼった。項目の紹介は省略する。結果、「仕事はお金を得るための手段に過ぎない」「仕事の時間と自分の時間の区別をはっきりさせたい」「残業などするよりは定時に帰宅したい」「仕事をするのは家族や家庭のためである」「いくつかの会社を転々とするよりいったん就職した会社はよほどのことがない限りかわらずにいたい」「あまり苦勞せずにのんびり働きたい」の6項目で有意差を得た（表3）。

はじめに、有意差の得られなかった項目の分析をする。「何かでおおもうけして働く必要がなくなったら働きたくない」「より高い地位をめざして努力したい」「できることならいつまでも学生生活を続けて職業などはもちたくない」「一生の仕事になるものをできるだけ早く見つけたい」「ひとつの職業にとらわれるよりその時々により有利な仕事につくほうがよい」「できることなら将来は雇われて働くよりも自分で独立して仕事をしたい」は、就労することを意識できている社会人群、職業への関心が薄い再入学群、看護専門学校と看護師というつながりを理解できている現役群で、年齢に関係なくそのとらえ方には違いがない。今回の調査ではその理由を明確にすることは困難であり、今後の課題としてゆきたい。

一方で、「仕事をするのは社会の一員としてのつとめである」「仕事が人生のなかで最も重要な意味をもつとは限らない」などは、年齢層により有意差がでて不思議ではない項目と考えるが、有意差がないということは何を意味するのだろうか。現役群・再入学群は、高校生の頃よりアルバイトの経験を持ち、学歴や年齢にかかわらずほぼ同質の仕事に就き<sup>16)</sup>、そこでの体験が将来の自己の就労者としての意味づけに影響している。さらに、就労経験がなくても、自分をとりまく親などの就労する姿などから何かを感じ取っているとも解釈できる。



表3 「年齢群」と「仕事についての考え」

	現役群			再入学群			社会人群			
	賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対	
仕事はお金を得るための手段	19.6	60.7	19.6	8.3	83.3	8.3	0	50.0	50.0	$\chi^2=8.458, df=4, p<.01$
仕事の時間と自分の時間の区別をつける	89.5	10.5	0	66.7	33.3	0	50.0	50.0	0	$\chi^2=10.511, df=2, p<.001$
残業をするよりは定時に帰宅したい	36.8	57.9	5.3	33.3	41.7	25.0	10.0	50.0	40.0	$\chi^2=12.197, df=4, p<.05$
仕事をするのは家族や家庭のためである	33.3	49.1	17.5	8.3	33.3	58.3	20.0	50.0	30.0	$\chi^2=9.664, df=4, p<.05$
いったん就職したら会社は変わらないでほしい	82.5	14.0	3.5	50.0	33.3	16.7	20.0	60.0	20.0	$\chi^2=18.708, df=4, p<.01$
あまり苦勞せずにのんびり働きたい	40.4	45.6	14.0	25.0	33.3	41.7	10.0	40.0	50.0	$\chi^2=9.664, df=4, p<.05$

ここからは、有意差の得られた項目について述べる。

まず「仕事はお金を得るための手段にすぎない」の結果では、社会人群は「どちらでもない」「反対」がいずれも50%だった。再入学群は、「賛成」「反対」がともに8.3%、「どちらでもない」が83.3%だった。現役群は「賛成」「反対」の双方が19.6%、「どちらでもない」は60.7%だった。これまでの結果から、就労することを意識していると考えられる社会人群であるが、就労する理由はお金を得るためではないとしている。仕事をするものの中心的価値を「自己利益」や仕事をとおして自分の目的を達成すると共に、会社に貢献するという会社観・組織観がうかがえる<sup>17)</sup>。「自己利益」とは、金銭の利益追求ではないと解釈するなら、社会人群はみずからが就きたかった職業を選択し、自己実現の場と考えていることは明確である。ところが、「反対」が存在はするものの、「どちらでもない」結果の多い再入学群・現役群については、まだ就労することの目的が明確になっていない結果ととらえられる。看護専門学校を卒業すれば看護師という職に就くことはイメージできていても、その目的は何なのかを問われてもまだ回答できない時期なのかもしれない。インタビューにより明らかとなる部分である。

次の「仕事の時間と自分の時間の区別をはっきりさせたい」では結果は、社会人群の「賛成」「どちらでもない」がそれぞれ50%だった。再入学群は、「賛成」66.7%、「どちらでもない」33.3%だった。現役群は、「賛成」89.5%、「どちらでもない」10.5%だった。いずれの群も「反対」者はいなかったことから、どの年齢層も仕事に関する時間のオンとオフの区別をつけることには同意しているが、再入学群・現役群と若い年代に「賛成」が多いことから、より確実に時間の区別をつけたい思いがあると解釈できる。

次の「残業をするよりは定時に帰宅したい」の結果は、社会人群では、「賛成」がわずか10%、「どちらでもない」50%、「反対」40%だった。再入学群は、「賛成」が33.3%、「どちらでもない」は41.7%、「反対」25%だった。現役群は、「賛成」36.8%、「どちらでもない」57.9%、「反対」5.3%だった。社会人群の「反対」が40%と多いこと理由は理解が容易である。しかし、現役群が「賛成」に並び「どちらでもない」が最多の結果であることは、新人看護師の立場や看護業務の多忙さなどを知っているかのようにも思える。

「仕事をするのは家族や家庭のためである」では、社会人群の結果は「賛成」20%、「どちらでもない」50%、「反対」30%だった。再入学群は、「賛成」8.3%、「どちらでもない」33.3%、「反対」58.3%だった。現役群は、「賛成」33.3%、「どちらでもない」49.1%、「反対」17.5%だった。続けて「いくつかの会社を転々とするよりいったん就職した会社によほどのことがない限り変わらないでいたい」の結果では、社会人群は、「賛成」「反対」がそれぞれ20%、「どちらでもない」60%だった。再入学群は、「賛成」50%、「どちらでもない」33.3%、「反対」16.7%だった。そして現役群の「賛成」は82.5%、「どちらでもない」14%、「反対」が3.5%だった。以上より特徴的と思われるのは現役群である。親の職業上のライフスタイルと職業意識が子どもに反映するといった指摘がある<sup>18)</sup>。無学歴無資格の親の場合、非典型雇用者となり長く勤められるような設置母体のしっかりした企業への就職は困難である。勤め先の倒産や解雇、あるいは雇用形態により収入が不安定な状況となる。宮本の指摘通り、この結果は身近な例からの学びの影響である。仕事をして収入を得ることが、家族や生活へのうるおいに影響することを実感しているゆえの回答と考えられる。看護専門学校の場合は3年間で卒業すれば看護師免許の取得が可能となり職に就き、収入を得ることに直結する。ここでは、現役群の看護専門学校への進学理由の真実が見え隠れしていると受け止めてよいと考える。「いくつかの会社を転々とするよりいったん就職した会社によほどのことがない限り変わらないでいたい」理由も、再就職の厳しい現状を目の当たりにしている体験に基づくと推測される。一方再入学群の結果からは、いまだ自身の将来を明確に描けずにいると解釈が可能であり、インタビュー結果をうけてあらためて考察する。

最後に、「あまり苦勞せずのんびり働きたい」ことについて、社会人群は、「賛成」10%、「どちらでもない」40%、「反対」50%だった。再入学群は、「賛成」25%、「どちらでもない」33.3%、「反対」41.7%だった。最後に現役群は、「賛成」は最も多い40.4%、「どちらでもない」45.6%、「反対」14%の結果だった。社会人群の年齢は最高でも35歳である。この設問では、対象が50-60歳代であったら結果は異なったのではないだろうか。また、職業とは生計を立てるための仕事<sup>19)</sup>であり、正規雇用で働いたことのある社会人群の率直な思いが結果として表出されている、就労経験者ならではの回答といえよう。「反対」が社会人群に次ぐ多さだが、「賛成」とする者も2番目に多い再入学群については解釈が難しく、モラトリアム的に自分に適した職探しの最中にあると解釈する。

以上、仕事についての考えで、「仕事はお金を得るための手段に過ぎない」「仕事の時間と自分の時間の区別をはっきりさせたい」「残業などするよりは定時に帰宅したい」「仕事をするのは家族や家庭のためである」「いくつかの会社を転々とするよりいったん就職した会社はよほどのことがない限りかわらずにいたい」「あまり苦勞せずのんびり働きたい」の項目から、現役群の仕事についての考えには、家庭の経済状況や生活水準、そしてその中で親との関係などが影響していることがわかった。再入学群では、高等教育を経て再び看護専門学

校へと進んでいるが、その目的があいまいであることが明らかになった。ほんとうに就きたい職を探しているのかどうか、また職業教育を目的としている専門学校に属する者としての意識がはかりきれない。社会人群は就労することへの意識が高く、また看護専門学校での学びはこの職に就くことで自己実現をめざしていることがわかった。

#### (4) 現在の学校への入学動機

設問は11項目だった。結果有意差を得たのは、「学校生活を楽しむため」1項目だった。有意差の得られなかった項目で、「就職や転職準備のため」「結婚準備のため」「趣味や教養を深めるため」については、看護専門学校が教養教育を深める目的の学校でないことを理解したうえで入学ととらえられる。同様に「仕事に必要な技術や知識を身につけるため」「免許や資格を取得するため」「高卒だけの資格よりも就職や結婚に有利だと考えたため」「何もしていないよりはいいから」からは、看護専門学校への進学を決めるにあたり、看護専門学校の位置づけを理解しているととらえられる<sup>20)</sup>。それでは、有意差の得られた項目について考える(表4)。

表4 「年齢群」と「現在の学校への入学動機」

	現役群			再入学群			社会人群		
	そのため	どちらでもない	そのためでない	そのため	どちらでもない	そのためでない	そのため	どちらでもない	そのためでない
学校生活を楽しむため	31.6	54.4	14.0	8.3	58.3	33.3	10.0	30.0	60.0

$\chi^2=12.844, df=4, p<.05$

まず結果は、「学校生活を楽しむため」では、社会人群は「そのため」10%、「どちらでもない」30%、「そのためでない」60%だった。再入学群は、「そのため」8.3%、「どちらでもない」58.3%、「そのためでない」33.3%だった。現役群は「そのため」31.6%、「どちらでもない」54.4%、「そのためでない」14%だった。以上より、社会人群のわずかな「そのため」は、久しぶりの学校生活を楽しみたいという思いだと解釈できる。仕事を辞めての入学や家庭での役割をもちながらの入学者が多く、せっかく与えられたこの3年間を有意義に過ごしたいという願いが感じられる。「そのためでない」60%は、これまでの結果同様に、目的意識の強い社会人群の当然の結果といえる。現役群の「そのため」は、高校生活にピリオドを打ち、新しい学校生活への希望が感じられる。現役群・再入学群の「どちらでもない」の結果は、それぞれ看護専門学校へ入学前の学校生活と比較して描いていたこととは異なる現実にはり合いをなくし、混乱している結果ととらえられないだろうか。例えば、高校時代より厳しく感じる学則の存在や担任制度をとらない学校生活での過ごし方は、思った以上に自分の行動に自分が責任をもたなくてはいけない。とても楽しむ状況ではなく、「そのためでない」の数値も伸びていないのではないだろうか。

## (5) 「現在の学校に通って感じること」

これについては22項目で尋ねた。内容は割愛するが、学校の設備や整備に対することと、さらにその環境で自分が感じていることを問う内容である。有意差が得られたのは、「何のために勉強しているのか意味がわからなくなることがある」「授業をさぼったり、学校を休みたくなることがある」「看護の道を選んだことを後悔することがある」の3つだった。すなわち、学校の設備や整備への感じ方に差がなかったということは、学校の機能面に対する感じ方には年齢による差がなかったといえる（表5）。

表5 「年齢群」と「現在の学校に通って感じること」

	現役群		再入学群		社会人群	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
何のために勉強しているのかわからなくなる	31.6	68.4	8.3	91.7	0	100 $\chi^2=6.558, df=2, p<.05$
授業をさぼったり休みたくなる	57.9	42.1	25.0	75.0	30.0	70.0 $\chi^2=6.009, df=2, p<.05$
看護の道を選んだことを後悔することがある	29.8	70.0	8.3	91.7	0	100 $\chi^2=5.981, df=2, p<.05$

詳しく見てゆく。まず、「何のために勉強しているのか意味がわからなくなることがある」では、社会人群は「いいえ」が100%だった。再入学群は「はい」8.3%、「いいえ」91.7%だった。現役群は、「はい」31.6%、「いいえ」68.4%だった。この結果は、これまでの結果同様、社会人群は看護専門学校生としての自分の目的が明確になっていることを表している。授業の内容は社会人群にとって決してやさしいものではないかもしれないが、自己実現に向けた強い意志のもと、授業にのぞんでいるととらえられる。再入学群は高等教育後の分野の異なる教授内容に対する興味や勉強することへのハードルの低さの結果といえよう。現役群では、看護の知識や技術を教授する教科の授業内容を難しく感じており、学校生活全般でおこなわれる多くの指導に対し、看護学生としてどのようにあればよいのか、とまどっている姿ととらえることができる。

2つ目の「授業をさぼったり、学校を休みたくなることがある」の結果は、社会人群は、「はい」30%、「いいえ」70%だった。再入学群は、「はい」25%、「いいえ」75%だった。現役群は、「はい」57.9%と半数を越え、「いいえ」は42.1%だった。社会人群・再入学群の傾向は類似しており、勉強することには抵抗のない両群であることが前項目の結果よりわかっている。

最後の「看護の道を選んだことを後悔することがある」では、社会人群は「はい」0%、「いいえ」100%だった。再入学群は「はい」8.3%、「いいえ」91.7%だった。現役群は「はい」30%、「いいえ」70%だった。この結果は「何のために勉強しているのか意味がわからなくなることがある」とよく似ている。社会人群は看護師への道りをまっしぐらに前進しているようだ。再入学群は、入学から3ヵ月ですでに自分のめざしたことでなかったかもしれない、

と感じている者もいると判断できる。看護専門学校のカリキュラムは、看護教育に必要な教科を中心に生まれ、大学や短大と異なりすべてが必修である。その窮屈さが表現されているとするなら、高校を卒業したばかりの現役群でも同様の結果と言えよう。

調査時期の入学後4ヶ月とは、授業内容は基礎分野および専門基礎分野の教科が多く、探究心をもてず授業に参加するととてもつまらなく感じられるであろう。小谷は若者は人や社会に対して自分は何をする必要もないし、何をしても無駄であるといった感覚に覆われているとし、生きる意欲も将来への希望、主体性・能動性は必要がない<sup>21)</sup>としている。これによれば、「現在の学校に通って感じる事」の結果より、再入学群・現役群には主体も能動も期待できず、授業に探究心を求めることも期待できないことになる。

以上アンケート調査からは、「勤め先の選び方や仕事についての考え方」、「看護専門学校へ通いながら感じていること」、「勉強に対して感じていること」では年齢群により結果が異なることがわかった。それは、就労経験のある社会人群は、目的をもって看護専門学校へ進んでおり、卒業後のことを視野にいれているととらえられる。高等教育を修了し、就労経験も浅いま看護専門学校へ進んだ再入学群は、学習者としての姿勢はうかがうことができるが、看護専門学校入学の目的や、今後自分がめざすことなどはあいまいであるにとらえられる。そして、高校を卒業と同時に看護専門学校の門を叩いた現役群は、自分で門を叩いたのかどうかや、何のために門を叩いたのか、など進学理由が不明確な状況であることがうかがえる。

次のインタビューではアンケート結果では十分考察できなかった点に注目し、年齢群の特徴や相違点を明らかにしていく。

## 2) インタビューの結果と考察

ここからは、インタビューにて得られた回答の抜粋内容を提示し、それらの考察を述べる。インタビュー実施者のリストは以下である。

表6 インタビュー実施者リスト

	性別	年齢	身内に看護師の有無	未婚・既婚	
A	女性	35	なし	既婚	社会人群
B	女性	33	なし	未婚	
C	女性	22	なし	未婚	再入学群
D	女性	25	なし	未婚	
E	女性	19	あり(姉・叔母)	未婚	現役群
F	男性	19	あり(両親)	未婚	

(1) 質問「看護師になろうと思ったきっかけ」への回答（以下は一部抜粋した内容である）

- A 「人と接する仕事じゃなかったから、人と接する仕事に就くためには勉強するなら今①か  
と思って、年齢的にも。」
- B 「『病院の仕事が自分にあっていて。』と感じました②。人のやさしさとかあたたかさ  
とか。人って1人じゃないんだ、と感じて」
- C 「たまたま実家へ帰った時知り合いの兄の話を聞いて、次は看護学校に入りたい！と思っ  
たんです③。」
- D 「大学の後、1年学校（特別教育専攻科）へ行って、急に思い立ったというか④。大急ぎ  
で願書取り寄せて。」
- E 「高校2年の時、進路を決めなくてはいけなくて、『じゃ看護学校でも行くか・・・』⑤って」
- F 「介護士を選択しなかったという点では、いとこのお姉さんがしていて、仕事は厳しいし  
給料は安いと聞いていたもので⑥。」

(2) 質問「看護専門学校を選んだ理由」への回答（以下は一部抜粋した内容である）

- A 「子どもの、面倒をみながらということとやはり年齢的にも⑦。大学はセンター試験もネッ  
クで。私英語と数学のこと考えたら絶対無理⑧って・・・」「近いことと、自己推薦制度  
が魅力でした⑨」
- B 「確かに、思わないでもなかったんです。授業料やセンター試験、あまた英語の勉強とか、  
社会をどうしよう⑩、とか。でもストレートで・・・と思ったら専門学校だな・・・と思っ  
たし⑪、ここは受験科目と家からの通学距離で決めました⑫。」
- C 「これはわたしのリサーチ不足というか。イメージ的に大学はたいへんそうに感じて⑬。」  
「他は一校落ちて、ここに受かったからです⑭。」
- D 「（看護大学への編入について）・・・ああ、ほんとですね。今先生に言われてそういう手もあっ  
たか、と、遅いですけど⑮。でも、あのとき大急ぎだったから選択肢にはなかったのも  
確かです」「直感。家から通うことや試験の日程をみたら、ここだ！と⑯」
- E 「勉強のことも考えずに決めたので、たいへんで・・・⑰。先生は『看護大学も』と言ったから、  
でもセンター試験あるし勉強しなくなかったから・・・⑱」「ここは高校の先生のすすめ  
があった。おまえでも大丈夫やって⑲」
- F 「どんな仕事かは、入学してからわかればいいか・・・⑳と」

各年齢群の特徴を明らかにする。まず、社会人群は、①②より看護の仕事に就くことを前提にしており、また自身の年齢や役割などをふまえた学校選びをしていることがわかる（⑦



⑪)。受験科目を考えたり (⑧⑩)、通学時間など学校生活を考慮したうえで (⑨⑫)、総合的に判断している。再入学群の③④、現役群の⑤⑥からは、明確な目的もたず看護への道を選んでいることがわかる。特に再入学群については、原の、彼らの多くは、すでに肩書きとしての「学歴」は取得済みであり、就職戦線で自分を有利な立場におくための「武器」を身につける必要に迫られている<sup>22)</sup>と指摘することに一致する。アンケート結果 (3)「仕事についての考え」同様、職業を意識しているとも思えず (⑭⑯)、自身がすでに高等教育を終えていることが認識できているとも思えない。モラトリアム的な状況と推測すると⑬⑰の発言も納得できよう。現役群は、まず自身の進路選択に主体性がなく、看護専門学校がどのような学校であるかすらよく知らずに、周りが勧めるままその通りにしている。何か困ったことが起こっても他人事となり、到底解決策など模索しない姿が目に見え浮かぶ。

あらためて、インタビュー結果と考察をまとめると、社会人群は、成人の学習者として見なすことが可能であり<sup>23)</sup>、看護の学習を継続するうえで彼女たちが必要と判断した内容について、求めてきた時に応えることが学習への支援となる。再入学群は、高等教育機関で身につけた学習者としての姿勢はあると判断できるが、看護専門学校の学生となったことの目的や、それにとまらぬみずからの目標設定が不十分である。特に、就業することへの意識づけや生活者であることの自覚、看護の学習への動機づけが必要である。現役群は、他の二群に必要とされること全てが必要と考えられる。まず、学習することへの支援である。高校時代に学習者としての姿勢が身につけているとはいいがたい状況で高等教育へと進んでおり、まさに学校における子ども中心の学問であるベタゴジーから、成人の特性をふまえた教育とされるアンドラゴジーへの移行期ととらえられる。

ここまで、アンケートとインタビューの結果より、看護専門学校入学までの経緯は多様であり、同一クラスで学校生活を送りながら、勤め先の選び方や仕事についての考え方、看護専門学校へ通いながら感じていること、勉強に対して感じていることはそれぞれ年齢群により異なることがわかった。

### 3 看護専門学校における初年次教育

調査結果より、同じ看護専門学校生でありながら、年齢群により看護専門学校入学動機や経緯、学校生活を送りながら感じていることが異なることがわかり、授業に臨む意欲や態度の違いに影響していると考えられた。

初年次教育の内容とは、①大学生活への適応、②大学で必要な学習技術の獲得 (読み・書き・批判的思考・調査・タイムマネジメント)、③当該大学への適応、④自己分析、⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入、⑥学習目標・学習動機の獲得、⑦専門領域への理解、など多岐にわたる<sup>24)</sup>。その目的を鑑みて、アンケート調査とインタビューの結果から、各年齢群への初年次教育の可能性を考察してみたい。

まず、社会人群は就労経験を経て、看護専門学校へ進学した自発性をもつ自律可能な成人の学習者<sup>25)</sup>であり、学習への意欲は強く、動機づけや方向づけなどの支援は不要と考えられる。しかし、学習者としてのブランクがあることで知識不足が懸念される。したがって、社会人群へは②大学に必要な学習技術の獲得（読み・書き・批判的思考・調査・タイムマネジメント）に該当する、レポートを書く力や意見と事実を分けて書く力、図書館の利用方法やインターネットでの情報収集力などへの、学習基礎的なスキルへの支援が必要である。

再入学群は、高等教育を経て看護専門学校へ入学した成人期にある学習者である。その経験から、学習者としての姿勢や高等教育機関で獲得した知識は兼ね備えているが、看護専門学校への入学目的が確立していない。したがって、③当該大学への適応、④自己分析、⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入、⑦専門領域への理解に該当する、看護専門学校生として看護を学習するという内発動機をもてるはたらきかけや、生活者としての自立や就労者となる意識への支援が必要である。

最後に、看護専門学校にもっとも多く入学する現役群は、上記二群に必要とされることすべての支援が必要である。具体的には、講義のポイントをまとめる力やノートのとり方、意見と事実を分けて書く力、レポートを書く力、400字程度のレポートを書く力、図書館の利用方法、パソコンを使った資料作成力、インターネットでの情報収集力、文献や資料の読解力、問題点の発見力、課題の解決力、批判する力、プレゼンテーション力、主張できる力、ものごとを見る力、粘り強く取り組む力など<sup>26)</sup>である。また、濱名は特に1年次生に対して、中等教育からの「移行」を「組織的」に「円滑」に図り、「成功」に水路づけることが初年次教育の中心的要素であるとしている<sup>27)</sup>。すなわちこれらのことが身に付くように、学校をあげてかかわることが必要であるとしている。さらに、濱名の述べる「成功」とは、看護専門学校においてはまさに看護師国家試験に合格することである。実学の学校と認識されている看護専門学校を経て、看護師免許取得すればそのまま専門職業人として職に就くことを、学生それぞれが情緒的にも理性的にも納得して<sup>28)</sup>、看護専門学校の学生となることが必要であり、そのために教員が特別にかかわることが初年次教育である。

以上より、初年次教育をおこなうことで、年齢群による学習者としての意欲や態度の均一化を図ることが可能であることが示唆された。

## おわりに

今回、看護専門学校の同一クラス内での、学習への意欲や態度には学生の年齢により違いがあると考え、アンケート調査とインタビューをおこなった。結果、年齢群により看護専門学校入学に至った経緯や勤め先の選び方、仕事についての考え方や看護専門学校へ通いながら感じていること、勉強に対して感じていることなどが異なることがわかった。言いかえれ

ば、同時期に看護専門学校に入学し同じ時間割で、同じ教室内で、同じ授業に参加していても、その修得内容や質に異なりのあることを意味する。それは、高度化多様化する医療の現場で看護師としての役割遂行が困難と思われる者でも、看護師国家試験に合格することで看護師として社会に排出されてしまうことにつながる。

看護師免許は、看護師国家試験に合格して得られる国家資格である。どの看護専門学校でも、この合格率でその学校の評価がくだされると受け止め、次年度の入学希望者数に直結するといっても過言でない。資格試験にすぎない看護師国家試験であるはずが、各校では、合格率をあげるために学校をあげて日夜努力している。伝統的に、看護専門学校では特別な支援をしなくても卒業生は看護師免許を取得してきた。しかし、大学のユニバーサル化にともない20年前であれば看護専門学校へ入学できなかった者が入学し、その基礎学力などが一様に低下している現状がある。本来高等教育機関に求められる教育の結果を得ることが困難になっている。

探究心を抱き看護を学ぶことに意欲的な学生ばかりであれば、どこの看護専門学校でも、水準に違いのない看護教育を提供できる。しかし現実的には、入学基準が多様である看護専門学校の卒業生の獲得した知識や技術には、学校により差がないとは断言できない。今回、学生を年齢により分類し、学習への意欲や態度の違いについて考察した。初年次教育には明確な規定はなく、各学校の学生に適した内容の精選と実行が重要である。その目的を広義にとらえ、現役群には中等教育から高等教育への円滑な移行を、再入学群へは異なる分野の高等教育への導入を、そして社会人へは職業人から高等教育を受ける学生となるための支援をおこなうことが、看護専門学校における初年次教育内容となる可能性が示唆された。

#### 〔注〕

- 1) 濱名篤・川嶋太津夫編著「初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向－」丸善出版 2006 3頁
- 2) M・トロウ著 喜多村和之訳「高度情報化社会の大学－マスからユニバーサルへ」玉川大学出版部 2000 269頁
- 3) 専修学校制度は、大学、短期大学につぐ高等教育機関として昭和51(1976)年に発足した。教養教育の修得を目指す大学と、専門技術の修得を目指す専門学校の区別は明確で、専修学校と呼ばれる一般課程、専門学校と呼ばれる専門課程、高等課程3つの課程がある。
- 4) 濱名・川嶋前掲書 5頁
- 5) 平成12(2000)年以降看護専門学校(3年課程)数は減少と増加を繰り返している。これは、看護専門学校(2年課程)と短大の数が統合や閉校などにより減少しているためである。医学書院販売部 SP 課調べ 看護学校便覧 2009
- 6) 原田慶子他「『人を育てる看護教育』の実現をめざして」看護教育 2005 46(10) 842頁
- 7) 三吉友美子他「入試前教育の試み 推薦入学予定者への入学前課題の実施と評価」看護教育 2005 46(10) 896頁
- 8) 森川晶子他「実践力の向上を図る卒業前看護技術フォロー実習」看護展望 2007 32(2) 263頁
- 9) 広瀬京子「初年次教育の動向から看護専門学校での初年次教育を探る」第39回日本看護学会論文集

看護教育 2008 409 頁

- 10) 小杉礼子「若者と初期キャリア『非典型』からの出発のために」勁草書房 2010 89 頁
- 11) 原清治「専門学校の機能変化に関する教育社会学的考察」『専門学校の機能変化に関する教育社会学的研究』佛教大学教育学部 2003 2 頁
- 12) 同上 3 頁
- 13) 安田雪「働きたいのに・・・高校生就職難の社会構造」勁草書房 2003 31 頁
- 14) 同上 31 頁
- 15) 山内乾史「現代大学教育論」東進堂 2004 46 頁
- 16) 小杉礼子「フリーターという生き方」勁草書房 2003 136 頁
- 17) 谷内篤博「大学生の職業意識とキャリア教育」勁草書房 2005 34 頁
- 18) 宮本みち子「フリーターとニート」小杉礼子編 勁草書房 2005 152 頁
- 19) 広辞苑第 6 版 岩波書店
- 20) 「専門学校に学ぶ大学・短大卒業生等の学歴観・職業観調査報告」（2000）によれば、専門学校への入学動機のベスト 3 は①専門的知識・技能の習得、②資格検定の取得、③興味関心のあることへの追及である
- 21) 小谷敏「若者たちの変貌一世代をめぐる社会学的物語」世界思想社 1998 226 頁
- 22) 原 前掲書 3 頁
- 23) エデュアート・リンデマン著 堀薫夫訳「成人教育の意味」学文社 1996 6-7 頁
- 24) 同上 9 頁
- 25) 濱名・川嶋 前掲書 246 頁
- 26) 山田礼子「初年次教育とは何か『生徒』から『学生』にするための方策」看護教育 2009 50（5）376-381 頁
- 27) 濱名・川嶋 前掲書 247 頁
- 28) 同上 246 頁

#### 〔参考文献〕

- 梶原宣俊「専門学校教育論-理論と方法-」学文社 1993
- 倉内史郎「専門学校とこれからの高等教育システム」大学と学生 文部科学省大学局学生課 1998
- 小杉礼子「キャリア教育と職業支援-フリーター・ニート対策の国際比較」勁草書房 2006
- 韓民「現代日本の専門学校-高等職業教育の意義と課題-」玉川大学出版会 1996
- 本田由紀「多元化する『能力』と日本社会-ハイパー・メリトクラシー化のなかで」NTT出版株式会社 2005
- 矢島正見・耳塚寛明編著「変わる若者と職業世界 トランジションの社会学」学文社 2001
- 谷内篤博「大学生の職業意識とキャリア教育」勁草書房 2005
- 吉本圭一「専門学校と高等職業教育の体系化」広島大学高等教育研究開発センター大学論集第 40 集 2008
- 吉本圭一「専門学校の発展と高等教育の多様化」広島大学高等教育研究開発センター大学論集第 6 集 2003
- 専門学校に学ぶ大学・短大卒業生等の学歴観・職業観調査報告 社団法人東京都専修学校各種学校協会 2000

（きゅうじ かずよう 教育学研究科生涯教育専攻後期博士課程）

（現職 金沢医科大学看護学部 助教）

（指導：原 清治教授）

2010 年 9 月 29 日受理